あさひの日だまり

令和６年　８月３０日（金）

NO.１７

辰野町立辰野東小学校　文責　片桐

～新しいピアノがきました～

末永くお世話になります

５０年前に寄付していただいた１音のピアノはその前にどこかで使っていたものらしく、年齢は６０歳に迫るくらいだったかもしれません。ずいぶんと長い間子どもたちのために音を奏でてきてくれました。そのピアノの伴奏で歌を歌った子どもたちの多くははすでに成人し、ピアノを迎えた当時の皆さんは私と同じ歳くらいになっておられます。卒業生の皆さんに「あの時のピアノを覚えていますか？」と尋ねてみたい思いがします。

その懐かしのピアノも調律師の方に「もう限界ですね」というお話をいただくまでになりました。ずいぶん頑張ってきてくれました。

そして、町教委の方の並々ならぬご尽力によって新しいピアノを迎えることができました。写真は音楽室に据えられた新しいピアノの伴奏で声を合わせている３年生です。子どもたちの視線は弦をたたく真新しく美しいハンマーの動きにそそがれています。

これから本校の子どもたちがこのピアノとともにまた新しい思い出と歴史を作っていってくれます。

～先生たちの夏休みの勉強～

研修の成果が出ました

夏休みに職員研修をしました。今までの研修は「ICT 機器を使っての授業構想」であったりとか「先輩のお話を聞く会」であったりといったような内容でした。私たちが新しいことを学び、それを子どもたちとの生活に生かしていく内容のものでした。そういう研修は欠くことのできない大切なものです。そんな中で今年は研修係の先生が「陶芸」の研修を企画してくださいました。「まず私たちが学びを楽しもう」という企画です。写真を見て下さい。講師の沢底の古村先生が焼き窯のふたを開けているところです。焼き上がりから１日経過し窯の温度は３０度まで下がっていました。いよいよ窯出しです。思わず息をのむ瞬間でした。思わず「おー」と声がもれました。こんな思いを感じられる瞬間はそうそうありません。

かけがえのない自分だけの焼き物（ビールジョッキとつまみ用お皿）を大切に家へ持ち帰りました。「どっしりとしていて色もいいじゃない」とお褒めの言葉をいただきながらさっそく試飲です。ざらざらした口当たりが何だかビールののど越しを邪魔しているようで使い具合はいまいちでしたが慣れるまで使い続けようと思います。

～太鼓の指導をしていただきました～

数日前に箕輪町の荻原大輔さんという方の太鼓の記事が長野日報に掲載されていました。音楽科の荒井先生がさっそく「学校へお招きしてかがきらの太鼓の指導をしていただけたら嬉しいです」というお話をして下さりました。連絡を取っていただいたところ話はとんとん拍子で進み、２９日にご来校いただく運びとなりました。本物は人を引きつけます。真剣なかがきらの子どもたちの表情がそれを教えてくれました。

～祖父母参観日へのご来校ありがとうございました～

祖父母参観日の最後に祖父母の皆様とお話しする機会がありました。その時のお話の内容です。目を通していただけたら幸いです。

本日は足元の悪い中ご来校いただきまして誠にありがとうございます。心より感謝申し上げます。そして、さらにこの場へ足を運んでくださいましたことに重ねて感謝申し上げます。

先日私の友だちがお母様をなくして初めてのお盆をむかえました。隣組の人たちと１３日の夕刻お新盆に自宅を訪れました。友だちの孫が来客に喜び、障子の影から顔を出したり隠れたりしていました。子煩悩な来客が声をかけてくれるのが嬉しくてはしゃいでいました。もう私もそういう年です。「うらやましいな～」って思います。孫が待ちきれない妻が今わが家で幅を利かせている猫を連れてきました。

話しは変わりますが、自分としては本当に若い時のままの意識なんです。いつの間に年をとったのか何を身につけてきたのか自覚がありません。本当に３０歳あたりからやり直したい気持ちです。

さらに年を重ねていくわけですが未来に見当のつかない不安ばかりがよぎります。「四十にして惑わず。 五十にして天命を知る」とかつていった人がいましたが、私の場合「６０にして多いに迷う」です。

こんな年になりましたが私の祖父母の思い出をお話しさせていただきたいと思います。

祖父母と私の関係は父母と私の関係に比べると少し違います。父母と私の関係は個としての父母、個としての私との関係です。互いに少し距離があり、甘えもありながら緊張感もあるというような関係でした。互いに融合し合うという感じは幼い頃も今もありません。

一方祖父母と私の関係は何というかもっと距離が近く溶け合った部分もあるような近しい関係でした。祖父母との思い出は何だか甘い思い出として思い出されます。私が一人っ子で、共働きの父母に代わっておばあちゃん子として育ったということも原因かもしれません。

祖父の思い出は四角い箱に入ったパイプのたばこの思い出です。缶に入ったタバコの葉をパイプに詰めてマッチで火をつけて吸っていました。なので、私は小学校入学前からマッチで火をつけることになれていました。せき込みながら痰をはいてタバコを吸っていました。私は祖父の鼻から出てくるたばこの煙をいつも眺めていました。

ある日学校から帰ると、木材会社に勤める祖父が崩れ落ちてきた丸太に足を挟まれ入院したという話を聞きました。ずいぶん長い間入院していました。その後祖父は正座をすることができなくなりました。入院の間一度だけ祖母が「寂しい」と言った記憶があります。「祖父母の年になってもそういう思いになるんだ」というようなことを幼い私は感じました。祖母が何だか可哀そうだと思ったのも覚えています。近所の方が「おじいちゃんは優しい人だったよね」と話してくれました。祖父と祖母はいつも一緒に散歩をし、一緒に旅行し、朝早くから布団の中でとりとめのない話をしていました。

祖母の思い出は、草むしりや草刈りやおやつです。おやつについては昨年お話しさせてもらいました。たまに一緒に草むしりをするのですが私はすぐに飽きてしまいました。祖母の草むしりは延々と続きました。しかも祖母の後ろには草一本も残っていないのです。祖母は鎌を研ぐのが上手でした。足に鎌をはさんで砥石を回すように研ぐのです。どんなに広い場所もすべてこのよく切れる鎌で草刈りをしました。牛を飼っていたので草は必需品だったのだと思います。祖母はうちに嫁ぐ前まで糸取り工女だったのだそうです。その当時の話はあまりしてくれませんでしたが「給料をもらいに行ったら酒飲みの父親がすでに給料を前借していて給料がもらえなかった」「盲腸の手術代は社長さんが出してくれた」というようなことを話してくれました。今では想像できないような生活です。

私と父母の会話は基本的に必要事項に関してでした。今でもそうです。一方祖父母との会話は、昔話であったり、はやりの歌の意味がよくわからないという不満話であったり、たばこや野菜作りや親せきのことや夜よく眠れないといった愚痴などでした。そんな中身のそれほどあるとは思えないような話を聞いているのが何となく安心感があって面白かったのです。そう考えてみると、子どもにとって父母の役割、祖父母の役割というものがそれぞれあるようにも思います。「おじいちゃんおばあちゃんは甘やかしすぎ！」と言われることもあるかもしれませんが、もしかしたらそれが大切な役割なのかもしれないです。